

れき みん

となん歴史民だより vol.64

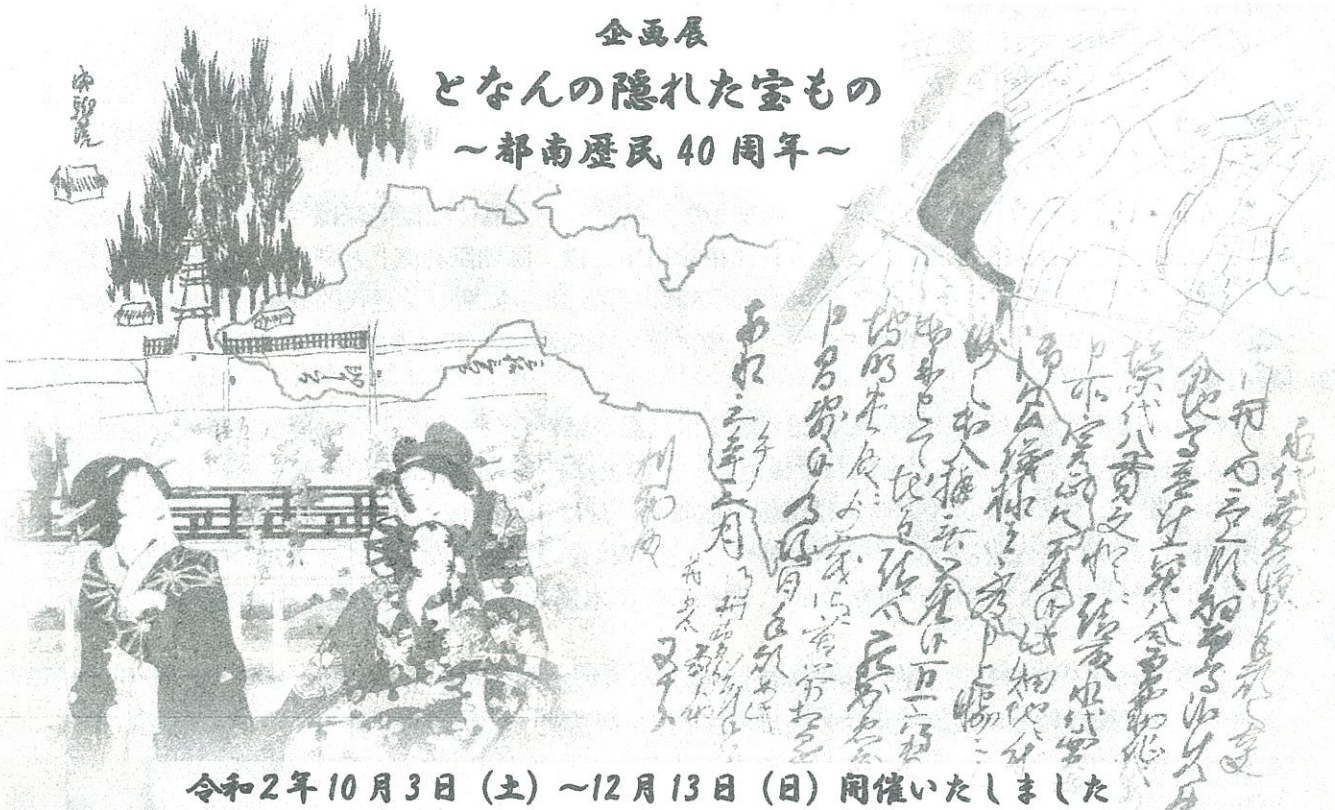
Morioka tonan history and folklore museum

令和2年12月28日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228

企画展

となんの隠れた宝もの ～都南歴史40周年～



令和2年10月3日(土)～12月13日(日)開催いたしました

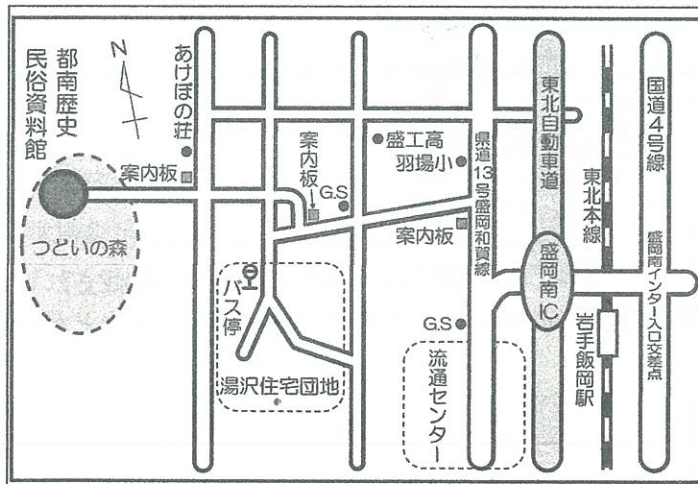
是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

- 「奥州道中(盛岡～見前)を歩く～都南地区の史跡・文化財・景観～」
館長 作山文康
- かけはしの会活動報告
- 資料は語る(64)
- 盛岡市所在
指定・登録文化財紹介(64)
- となんの先人⑦

MAP☆ACCESS

★「都南つどいの森」の案内板を目印にお越しください★



○利用案内

開館時間

午前9時から
午後4時まで

入館料

無料

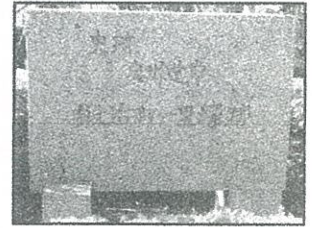
休館日

月曜日
(休日に当たるときは、直近の平日)、
年末年始

奥州道中(盛岡～見前)を歩く ～都南地区の史跡・文化財・景観～

盛岡市都南歴史民俗資料館 館長 作山文康

都南公民館主催の地元学講座で『奥州道中(盛岡～見前)を歩く～都南地区の史跡・文化財・景観～』と題して講演を行いました。寛延4年(1751年)に清水秋全が8代藩主利視公の命を受けて盛岡から江戸までの様子を描いた『増補行程記』と現在の地図や写真を見比べながら、神社仏閣や史跡・文化財などについて説明しました。参加者が興味・関心をもった史跡・文化財等について簡単に紹介します。



鍛冶町一里塚跡

① 鍛冶町一里塚

江戸から盛岡まで135里35町(約550キロメートル)でした。盛岡の鍛冶町(現紺屋町)に一里塚があり、街道の起点となっていました。現在の道路元標は盛岡市役所の向かいの県合同庁舎の信号機の近くにあります。

② 中の橋

中ノ橋は慶長16年(1611年)に架けられました。現在の中ノ橋には擬宝珠はついていませんが、明治43年までは「慶長16辛亥年 8月吉日 中津川中之橋 源朝臣利直」と刻まれた擬宝珠がっていました。明治43年の大洪水で中ノの橋が流され、明治45年に新しく近代的鉄橋として竣工された際に、擬宝珠は取り付けられませんでした。中ノ橋の擬宝珠は、下ノ橋に移されました。

③ 新山舟橋と北上川

今の明治橋の下流、盛岡市下町史料館の辺りに舟橋が架けられていました。両側に巨大な親柱と中島に大黒柱をたて、24艘ほどを鉄鎖で係留し、その上に長さ2間半ほどの敷板を並べて、人馬が往来できるようにしました。増水時には敷板を撤収し、舟は川原町側と仙北町側に引き上げられ、「川止め」にしました。江戸時代の『日本大橋づくし』では東の前頭2枚目(5番目)の橋でした。舟橋は、大河に架橋できない当時の知恵であり、明治7年に木橋の明治橋が架設されるまで存続しました。

④ 仙北町

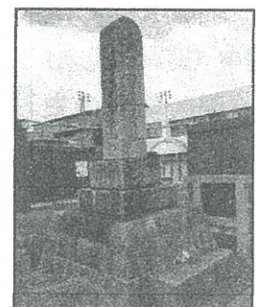
2代藩主利直公の時代に現在の秋田県仙北地方からの移住者を住ませた町です。近郷農村との関係で荒物・雑貨・古手屋・酒造業・飲食店など軒を並べた繁華な町でした。長松寺には大きな石仏が一体あります。これは、祇陀寺の天然和尚、後を継いだ長松寺の泰温和尚が、飢餓供養のため領内58053人から喜捨を得て、宋龍寺に伽藍と五智如来・十六羅漢(現茶畑らんかん児童公園)を13年かけて竣工する際、飯岡山から石材を運んで長松寺で試作した石仏です。出来栄えが良かったので長松寺に石仏一体が寄進されました。



長松寺の石仏

⑤ 仙北組丁

仙北組丁には、100戸ほどの足軽同心屋敷がありました。仙北組丁の南に柵形(ますがた)を置き、城下への出入りを取り締まりました。現在の盛岡中央消防署仙北出張所、柵形児童公園の辺りです。柵形を過ぎると松並木が続いていました。また、小鷹には刑場があり、重罪人が磔(はりつけ)や獄門の刑に処されました。嘉永5年(1852年)に相馬大作の子、勝之助が父の供養のために建立した感恩寺もあります。



小鷹刑場の供養碑

⑥ 川久保

川久保には一里塚が置かれました。また、志和稻荷街道の分岐点で、赤い大鳥居と茶屋がありました。一里塚は取り壊され、現在は説明板が設置されています。近くには、明治天皇行幸の碑、北十左衛門の墓、いたこ塚などがあります。

⑦ 津志田

2代藩主利直公の時代に、現在の青森県津軽地方からの移住者を住ませ、津軽町と称されていたこともあり。文化7年(1810年)に11代藩主利敬公は、藩公認の遊郭(1810年～1820年)をつくらせ、津志田町総鎮守として大国神社を創建しました。街道筋約330mに遊女屋・芸者屋・万屋・駕籠屋・茶屋・揚弓場などがあり、一大歓楽街であるとともに文芸風流の中心地でした。大国神社には、利敬公直筆になる「大国大明神」の額、遊女や楼主がおさめた絵画献額、俳人小野素郷筆の俳句献額が納められています。その後、嘉永3年(1850年)に13代藩主利濟公は、再び遊郭をつくらせました。(1850年～1856年)嘉永5年(1852年)に東北地方を旅した吉田松陰は、『東北遊日記』で津志田遊郭を通過した時の感想として「まさに道樹をたおし、良田を廃して、新たに妓楼数十件たつ。南部の国事、いたむべきかな。」と記しています。



大国神社

⑧ 三本柳

三本柳には、北上川の流れの跡にできた川跡沼である大沼がありました。三本柳村500石の用水池であるとともに、藩献上の鳥溜池でもありました。現在のJ A岩手中央見前支所の辺りで、現在も「大沼」というバス停留所があります。戦後に埋め立てられ、現在は住宅地となっています。

⑨ 見前

城下から二里にある重要な宿場町でした。一里塚(盛岡城下から二里)、高札場、渡船場などがありました。天明4年(1782年)の記録では、渡船場は、三本柳、見前、高田、徳田などにありました。三本柳の渡船場は、昭和47年頃までありました。明治7年に明治橋が架設され、続いて北上川に橋が架設されたのは、昭和37年の徳田橋です。その間約90年もの間北上川に橋が架けられませんでした。都南地区では、昭和60年に都南中央橋、昭和62年に都南大橋が架設され、やっと北上川の東西を往来できるようになりました。



昭和35年見前小学校の遠足
渡し舟で北上川を渡る様子

講座では、紙面で紹介したより、もっと多くの史跡・文化財を紹介しました。参加者から「初めて知った。」「たいへん勉強になった。」「とても楽しかった。」などの好意的な感想をたくさんいただきました。

「となん・かけはしの会」活動報告



1 茶話会「奥州斯波氏について」

令和2年9月12日(土)

講師：紫波町観光案内人しゃ・ペーる代表 石幡信氏

2 史跡・文化財めぐり

～紫波町中部・東部の史跡・文化財巡り～

令和2年10月15日(木)

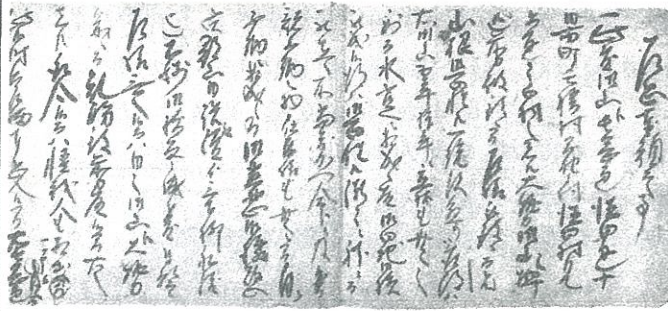
陣ヶ岡・蜂神社、走湯神社、勝源院の逆ガシワ、
城山公園(高水寺城跡)、志賀理和気神社、
法廣山正音寺、白山神社・薬師堂、
義経神社(判官堂)、是信房墓所、大巻館跡

3 歴史探訪ウォーキング(上の橋かいわい)

令和2年11月5日(木)



史跡・文化財めぐり



おそれながらねがいあげてまつりそうろうこと
【乍恐奉願上候事(渡船阻止嘆願書)】

屏風の下張りから発見された古文書である。末尾が失われているため、いつ、誰が書いたものかは不明であるが、代官所に提出した訴文の下書きと推測されている。

北上川対岸の村々の住民が大勢渡ってきて薪材を伐採するため、山の樹木が減少し、田の水不足に悩まされている。くいとめるために日詰・三本柳間の渡船場で渡河禁止の措置をとって欲しい、と訴えたものである。

背景には馬の増産がある。暖を取り馬糧の煮炊きや飲料の湯沸かしをするため薪炭の需要が増加した。しかし山間部が少なく資源に乏しい村もあり、薪炭確保のためにトラブルを引き起こすこともあった。

文中では、渡河禁止措置がなければ乱闘になり怪我人や死者が出る可能性もあると逼迫した事態を訴えており、当時の状況を生々しく伝えている。



はなしょうぶ ちょうずつば めい もりおかじゆうたちばなのたかいえぞう
花菖蒲に蝶図鐺 銘 盛岡住橋孝家造

写真：岩手県立博物館提供

江戸時代末期に造られた、縦8.2cm、横7.6cm、厚さ0.7cmの鐺です。

鉄地で四角形の角を取った撫角といわれる形で、周辺部から中心部に向かって表面をなだらかに彫り下げています(鋤下げ)。花菖蒲や舞う蝶を鑿で線刻し、糸透かしの技法を使って巧みに描いています。羽や花卉などには金の布目象嵌や水玉象嵌が施され、優美な造形と技が見事に調和しています。

橋孝家は盛岡藩御用の鐺師として、多くの作品を残しています。

参考文献：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』(2008)
岩手県立博物館デジタルアーカイブ

とんの先人⑦ 藤川 清助 [前]

農事改良功労者であり衆議院議員も務めた藤川清助は、明治元年(一八六八)七月二十六日、見前村に生まれた。幼名は栄助という。生家は屋号を葛蒲田(あやめだ)といい、農地解放以前は東北本線の線路から国道四号線までの広大な土地を有する大地主だったと伝えられている。

幼少期には教育者・神職者である宮崎求馬(もとま)に就いて漢学を学んだ。

二十代にして見前農会長に就任し、三十代には紫波郡の農会長にも推され、農事改良に尽力した。そのため明治三十九年(一九〇六)には大日本農会総裁(当時は伏見宮貞愛親王)から農事改良の奨励に努力した功により賞状を授与された。清助は自らも農業に携わり、品評会に麻・甘藍・うるち米等を出品し大臣賞や知事賞を受賞、また馬鈴薯および百合根の頃には同時に審査員も務める立場にあった。

農事に携わる傍ら、数え二十二歳で村会議員、三十七歳で紫波郡会議員に就任するなど政治の世界での経験を積んでいたが、中年期以降、県の農会議員を務めつついよいよ県議員や見前村長、衆議院議員として進出していった。

清助は立憲政友会に所属し、原敬との面識を持つようになった。明治四十三年(一九一〇)五月二十六日には、原が母リツの米寿を祝うため約一週間にわたり別邸(介寿荘)で催した宴に清助(当時は栄助)も招待されたことが『原敬日記』に記されている。



『御大典紀念岩手縣名士肖像録』
(同刊行会、昭和5年)
国立国会図書館デジタル
コレクションより

参考文献…
都南村誌編集委員会『都南村誌』都南村、一九七四
吉田長一郎「岩手の農業をつくる人々六十 藤川清助(栄助)の巻(上)」
『岩手の農協』第三十六巻第四号、岩手県農業協同組合中央会、一九八九年
小沢一昭「原敬と藤川清助」『とんの歴史だより』五十二号、平成二十九年